Vol.2016-CVIM-200 No.42
2016/1/22

MIRU2015若手の会実施報告

満上 育久[1,a)] 石井 育規[2,b)] 河合 紀彦[3,c)] 川西 康友[4,d)] 久保 尋之[3,e)] 米谷 竜[5,f)]
舩冨 卓哉[3,g)]

概要：2015 年 7 月に開催された MIRU2015 若手の会ついて報告する．本イベントは，MIRU の開催により画像関連分野の研究者が集まる機会を活用し，同分野の若手研究者・学生が集いともに学ぶことで相互の交流を深めることを目的としている．特に今回は，単に MIRU 本会議と会期・会場をともにするだけでなく，MIRU 本会議と密に連携しながら規格内容を設計・実施し，様々な新たな試みを行った．本発表では，本イベントの企画段階，会期中の様子，イベント終了後に実施した参加者からのアンケート等について報告する．

Report on MIRU2015 Young Reseachers' Event

Mitsugami Ikuhisa[1,a)] Ishii Yasunori[2,b)] Kawai Norihiko[3,c)] Kawanishi Yasutomo[4,d)]
Kubo Hiroyuki[3,e)] Yonetani Ryo[5,f)] Funatomi Takuya[3,g)]

1. はじめに

MIRU2015 若手の会は，MIRU の開催により画像関連分野の研究者が集まる機会を活用し，同分野の若手研究者・学生が集いともに学ぶことで相互の交流を深めることを目的とした企画であり，2013 年から隔年で開催されている．特に今回は実行委員長が MIRU2015 の重要テーマの一つとして「若手の育成」を掲げており，単に MIRU 本会議と会期・会場をともにするだけでなく，MIRU 本会議と密に連携しながら若手の会の企画内容を設計・実施した．今回は，MIRU 会期間合宿形式で行われ，スケジュール的にも内容的にも非常にハードな内容だったにも関わらず，上は大学の助教や企業の研究者，下は学部 4 年生までの 44 名もの参加者を迎え，大変活気のあるイベントとなった．本報告では，この MIRU2015 若手の会の企画内容や，イベント終了後に実施した参加者からのアンケート結果を含めた実施報告を行う．

1 大阪大学
2 パナソニック株式会社
3 奈良先端科学技術大学院大学
4 名古屋大学
5 東京大学
a) mitsugami@am.sanken.osaka-u.ac.jp
b) ishii.yasunori@jp.panasonic.jp
c) norihi-k@is.naist.jp
d) kawanishi@is.nagoya-u.ac.jp
e) hkubo@is.naist.jp
f) yonetani@iis.u-tokyo.ac.jp
g) funatomi@is.naist.jp

2. 実行委員会

上述のように MIRU2015 本会議と若手の会が密に連携した企画運営を行うことができるよう，若手の会企画委員長は，MIRU2015 本会議の実行委員会に参画し，本会議の方針に沿ったトップダウンのフレームワークの中での企画立案・調整を行う一方，若手の会実行委員会を組織し，若手研究者の状況や意向を反映したボトムアップな企画立案や現場レベルでの綿密な企画設計を行った．若手の会実行委員は，地域や分野のバランスを考慮するとともに大学関係に偏らないよう選定した．結果，地域としては東京・名古屋・奈良・大阪という広範囲，専門も CG からパターン認識，基礎から応用と幅広い研究分野の観点で考えることのできる組織となった．

3. 特別講演

特別講演には，大阪大学教授の松下康之先生をお迎えした．松下先生は，2014 年度まで中国の Microsoft Research

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

Asia に所属され，CVPR,ICCV 等のトップレベルの国際会議や PAMI,IJCV 等のトップジャーナルに数多くの論文を通しておられ，またこれらの国際会議や論文誌でプログラム委員や編集委員も務めておられる，世界的に著名な研究者である．この松下先生が，ご自身の研究成果のお話ではなく，「論文の書き方」というメタなトピックに関して，ご自身の経験や具体例を交えてご講演してくださるという非常に貴重な機会となった．講演後に長めの質疑時間を設けたが，それでも足りないくらい数多くの質問，議論，相談などがなされ，大変盛り上がった．事後のアンケートでも参加者の評価・満足度が極めて高かった．

図 1　松下康之先生の特別講演の様子

4.　【企画 1】研究マップ・研究者マップを作ろう！

MIRU 若手の会の企画 1 として，「研究マップ・研究者マップを作ろう！」という企画を実施した．この企画では，参加者間で議論する力を身につけること，研究を知ること，情報を整理する力を養うことを目的として，グループごとにある研究分野やテーマを設定し，その分野の研究を調べて各研究がどのような関係にあるか，どのような有名な研究者がいるのか，といった情報をまとめた研究マップ・研究者マップを作成するというグループワークを行った．

4.1　開催までの準備

参加者に対し，申し込み時に各自の興味分野，キーワードを訪ねて，各参加者がどのようなバックグラウンドなのかを調査した．その情報を元に，参加者を 6 つのグループへとグループ分けした．このとき，同じ研究グループに所属する人ができるだけ 1 つのグループに固まらないように組み替えた．

4.2　当日の様子

本企画は，3 日間にわたって実施をした．

4.2.1　1 日目

初日は，全参加者が自己紹介を行った．各自，1 分半のプレゼンを行い，自己紹介及び自分の研究紹介を計 2 枚のスライドを用いて行った．

その後，各グループに分かれて議論を開始した．初日のタスクとして，グループで取り組むテーマの決定，内容のまとめ方の方針決定，メンバーの分担決定が行われた．

4.2.2　2 日目

前日の議論を踏まえて，まとめた方向性，各メンバーの分担について中間発表を行った．各グループ 10 分の持ち時間で発表を行い，他の参加者や実行委員から意見を得た．意見を踏まえ，発表の後さらに議論を進め，最終発表会に向けての資料作成を行った．

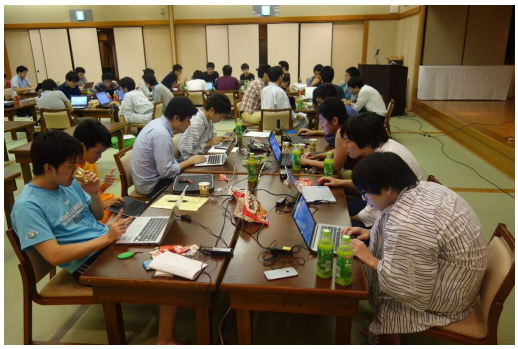

図 2　グループワークの様子

4.2.3　3 日目

最終発表会として，各グループ持ち時間 25 分（発表 15 分，質疑 10 分）で発表を行った．

図 3　最終発表会の様子

グループ 1（コンピュテーショナルフォトグラフィ）

青砥 隆仁（奈良先端科学技術大学院大学）井手口 裕太（大阪大学）岩口 尭史（奈良先端科学技術大学院大学）岡本 翠（早稲田大学）野沢 綸佐（早稲田大学）藤田 秀（名古屋工業大学）余錦 澤（東京大学）

グループ 1 は，コンピュテーショナルフォトグラフィを研究している人が多く集まっていたため，専門性を発揮して，初学者に嬉しいコンピュテーショナルフォトグラフィ分野における研究マップ作りがテーマとなった．研究を整理したプレゼンだけでなく，すぐに Web 公開できるレベルの，体系的に整理されたドキュメント作成も行われていた．

グループ 2（3 次元計測・復元）

石川 涼一（東京大学）佐々木 善一郎（名古屋工業大学）高橋 康輔（日本電信電話株式会社）武原 光（奈良先端科学技術大学院大学）田中 賢一郎（大阪大学）中川 陽介（九

州大学）野澤 直樹（早稲田大学）樋口 未来（東京大学）

グループ 2 は，メンバー間で共通するものとして，3 次元計測・復元をテーマにマップ作成を行った．3 次元計測・復元の各研究分野におけるキーマン・研究室を挙げ，それぞれの師弟関係などが可視化されていて興味深い発表であった．

グループ 3（環境ビッグデータ）

井上 中順（東京工業大学）櫻田 健（東京工業大学）重中 亨介（富士ゼロックス株式会社）杉田 祐樹（東京大学）福井 宏（中部大学）細野 峻司（日本電信電話株式会社）松井 勇佑（東京大学）

グループ 3 は環境情報のリアルタイムビッグデータが収集される未来を想定し，大量のカメラ画像を処理するアプリケーションを考えた際に必要となる課題=これから流行る（かもしれない）研究についてマップ作成を行った．環境ビッグデータに関する研究を，撮影位置推定，プライバシー保護，機械学習，行動解析の 4 分類に分け，それぞれについて個々の研究事例を整理して発表した．

グループ 4（未来を MIRU）

伊東 敦（富士ゼロックス株式会社）金子 卓弘（日本電信電話株式会社）金子 直史（青山学院大学）新村 文郷（名古屋大学）塚谷 俊介（東京大学）原 健翔（名古屋大学）宮城 優里（お茶の水女子大学）

人の行動認識を扱う研究をしている人が多かったグループ 4 は，未来を MIRU，というテーマで，MIRU 参加者の行動，ポスターセッションの混雑度や対話から MIRU の優秀ポスター賞を決めるアプリを考え，それに必要な技術についてマップ作成を行った．

グループ 5（Attention の予測・計測・利用）

秋月 秀一（中京大学）石川 惠理奈（京都大学）佐藤 優伍（早稲田大学）下西 慶（京都大学）高嶺 朝理（九州大学）松本 大輝（東京大学）峰松 翼（九州大学）Xueting Wang（名古屋大学）

グループ 5 は，“attention” というキーワードを軸に，どのような attention か，何に使われる attention かといった分類で研究マップを作成した．関連研究のマッピングだけでなく，グループのメンバーの研究や，MIRU2015 で発表された関連研究についても整理が行われていた．

グループ 6（検出）

牛久 祥孝（日本電信電話株式会社）小田 紘久（名古屋大学）齋藤 真樹（東北大学）長谷川 昂宏（中部大学）藤吉 輝明（久留米工業高等専門学校）増田 淳基（広島大学）三原 基（奈良先端科学技術大学院大学）

グループ 6 は各メンバーの研究テーマが様々であったこともあり，テーマとして「検出」を設定し，様々な検出タスクに関して研究マップ作成が行われた．背景差分，特定物体検出から医用応用まで，幅広く検出に関する研究がまとめられていた．

4.3 表彰

最終日の発表後，各参加者に対し，発表をふまえて「一番良かったと思うグループを一つ選んでください」というアンケートを実施し，その投票結果から以下の賞を決定した．

- 若手最優秀賞：グループ 1「コンピュテーショナルフォトグラフィ」
- 若手優秀賞：グループ 2「三次元計測・復元」

図 4　グループ 1，若手最優秀賞受賞の様子

図 5　グループ 2，若手優秀受賞の様子

4.4 参加者からのフィードバック

事後アンケートでは，満足度に関して 33 件の回答があり，その内訳は，満足: 5，やや満足: 11，どちらでもない: 6，やや不満: 11 と，半数程度が好意的な評価であった．以下に評価ごとにいくつかの詳細なコメントを抜粋する．

満足

- 異なった研究のバックグラウンドを持った方と話し合って、作業をすることは楽しく、また勉強になりました。この企画はかなりハードだったと感じたのですが、その分、先輩方の話を聞くことや、調べること、考えることが多くでき、良かったです。最初のテーマ設定をする際、班で研究の共通点を探すために、自分の研究について、違った視点で考え、他のテーマとのつながりを意識することができました。研究マップを作る時に、自分の研究の周辺について調べたので、今後の研究にいかせそうです。
- いろいろな人と意見を交わしながら一つのものを作り上げることができたことは、とてもいい経験になりま

した。

やや満足

- 人を軸に調べるということを今までしてこなかったので、とても勉強になりました。今後も使えるような研究者マップを作るためには、MIRU 前の事前準備が必須だったかなと思いました。
- こうしたマップを作成すること自体は非常に重要であり，有用であると私自身感じています．そのため，様々な分野におけるマップを知ることができたという面では有意義でした．しかし，作業の内容を考えたときに，作業可能な時間の割に自由度が高すぎるなとも思いました．そのため，どういった方向性にするかなどの議論に時間がどうしてもとられ，実作業をする時間があまりありませんでした．結果的に睡眠時間や休憩時間を削ることで作業時間を捻出等しており，本会議への参加がおろそかになってしまった感が否めませんでした．

どちらでもない

- 企画テーマは非常に面白かったが、事前の準備期間が欲しかった。特に、研究マップのテーマや方針は、もっと時間をかけて決めたかった。
- もう少し『自分の研究』について語り合う場が欲しかった。

やや不満

- MIRU 若手の会で合宿スタイルなのは楽しいですが、MIRU 本体への参加に影響を及ぼすようなスケジューリングにならざるを得ない企画は避けた方が良いように思います。MIRU 本体の特定のセッションを休んで作業している若手や、深夜まで作業して眠気を解消できずに MIRU に参加する若手を散見しました。
- もう少し分野の近い人と同じグループになりたかったです。

4.5 所感と今後の課題

今回，興味分野とキーワードによってグループ分けを行ったうえで，所属を考慮してシャッフルを行ったが，どうしても苦しいグループ分けになったところや，特定の研究室で固まってしまったグループもあった．また，様々な異なる分野の人が集まったグループもできてしまった．同じ分野で固まったグループは，専門性を発揮した発表ができていたが，各自の研究テーマが異なるグループは，今回の発表テーマを設定する時点から苦戦を強いられてしまった．グループ分けは非常に難しい問題であるが，参加者からの事前の情報収集をもう少し考えることで，こうした問題を改善できるかもしれない．

また，研究マップ・研究者マップを作ろうという課題自体，自由度が高すぎたこともあり，苦労した参加者が多かったように思う．もう少し課題に対するインストラクションを行うことが必要だったと思う．

さらに，マップを作成するにあたって論文調査を行う必要もあったため，開催期間中だけでは作業時間不足だったと思われる．MIRU 会期前に作業・打ち合わせをしたかったという意見もある一方，MIRU 本会議での発表準備で忙しい期間に追加で作業をしなければならないのは大変という意見もあるため，どちらが良いかを決めるのは難しいが，今後，参加者の作業量を考慮して企画決定を慎重に行う必要がある．

5. 【企画 2】メンターと共に参加するポスターセッション

ポスターセッションでは，画像に関連する研究分野において現在第一線で活躍されている先生・研究者をメンターとし，若手の会参加者とメンターが一緒に多くのポスター発表を聴講する企画「一緒に見たら１００倍わかる：メンターと共に参加するポスターセッション」を実施した．本企画では，参加者 1 グループ (4〜5 名程度) につき 1 名のメンターがつき，聴講した各発表についてともに議論をすることで，新たな視点・価値観を学ぶとともに，メンターとの人的ネットワークを構築することを目指した．

5.1 開催までの準備

まず大学，研究所，民間企業の研究者の方々へ，メンターになっていただけるかの依頼，またなっていただける場合にはどの日時が都合がよいかの調査を行い，9 名のメンターを決定した．次に，若手の会参加者に対しインタラクティブタイムで一緒に回りたいメンターの希望調査を行い，最終的に表 1 に示すように，インタラクティブタイム，メンター，参加者の組み合わせを決定した．

5.2 当日の様子

当日は，まずポスター発表会場前に集合した後，若手の会参加者が簡単に自己紹介し，発表を聞きたいポスターについて話し合いを行った．次に，約 2 時間のインタラクティブタイムのうち最初の約 1 時間半で様々なポスター発表を回り，残りの約 30 分で会場の外のスペースで，メンターと参加者が議論・歓談を行った．図 6 にポスター発表を回っている様子，図 7 に議論・歓談をしている様子を示す．

ポスター発表の聴講においては，どのグループとも発表 1 件に対して丁寧に聴講するため時間が長く，また，人気のある発表に対しては発表者の対応を待つために時間を要することもあり，聴講できた発表数はそれほど多くないようであった．また，5.3 項の感想にもあるように，1 グループあたり 4，5 名の参加者がいるため，必ずしも聞きたい発表に時間をかけられるわけではなかったようである．議論・歓談においては，グループによっては大いに盛り上がり，インタラクティブタイムの時間を超過する場合もあった．

表 1　インタラクティブタイム，メンター，参加者の組み合わせ (敬称略)

IT1	藤吉弘亘	重中亨介，小田紘久，齋藤真樹
7/28	(中部大)	野澤直樹，高嶺朝理
16:35	佐藤いまり	Jinze Yu，田中賢一郎，松本大輝
～18:30	(NII)	青砥隆仁，岩口堯史
IT2	向川康博	野沢綸佐，井手口裕太，岡本翠
7/29	(NAIST)	佐々木善一郎，藤田秀
10:35	千葉直樹	増田淳基，三原基
～12:30	(楽天)	牛久祥孝，樋口未来
IT3	亀田能成	高橋康輔，塚谷俊介，武原光
7/29	(筑波大)	金子直史，福井宏
16:35	木村昭悟	井上中順，櫻田健，藤吉輝明
～18:30	(NTT)	秋月秀一，石川惠理奈
IT4		
7/30	蔵田武志	石川涼一，中川陽介，Xueting Wang
10:35	(産総研)	宮城優里，伊東敦
～12:30		
IT5	黄瀬浩一	細野峻司，松井勇佑，原健翔
7/30	(阪府大)	長谷川昂宏，新村文郷
16:05	平山高嗣	下西慶，峰松翼，佐藤優伍
～18:00	(名大)	金子卓弘，杉田祐樹

図 6　ポスター発表を回っている様子

図 7　メンターと参加者が議論・歓談をしている様子

5.3　参加者からのフィードバック

事後アンケートでは，満足度に関して 33 件の回答があり，その内訳は，満足: 11，やや満足: 11，どちらでもない: 7，やや不満: 4，不満 0 であった．すなわち，およそ 7 割の回答者に好意的な評価をいただいた．以下に評価ごとにいくつかの詳細なコメントを抜粋する．

満足

- メンターの方がどういう所について目をつけるのかを直接見られ勉強になりました．
- 楽しかったです．ただ，1 件あたりの滞在時間が長く，数を回れなかったのが少々残念でした．
- ポスターを回る際に混雑等もあって，必ずしも計画的に動けたわけではなかったが，最後の方に先生を囲んで懇談出来たのは大変楽しかった．
- また開催してほしい企画です．
- メンターの先生と交流できたことが良かった．

やや満足

- 今まで話したことのない先生と話せる機会が得られたのでよかったですがポスター見学よりもその後の座談会での交流がほとんどだったので，だったらただ 1 時間座談会でもよかったのかなと思いました．
- ポスターセッションについて，複数の聴衆対発表者という形式で話を聞けるのがとてもよいと思いました．そうでないと，後で途中から説明を聞いて，理解できず終わるということも多々あります．また先生の質問は的を射たもので，とても勉強になります．
- 一緒に回った人の質問や議論の内容を聞けただけでもいい経験になりました．

どちらでもない

- どうしても一人で回るときにやる「興味の無いポスターを飛ばす」「気になるところだけ質問して次に行く」といったことが出来なかったので，説明中のところに並んで，最初から聞くということを数回やっただけで時間が終わってしまいました．これで学生さんたちのポスターへの見方が深まったかどうかは疑問です．
- メンターの方との交流を深めるという点ではとても良かったですが、自分の見たいポスターを十分に見ることができなかったのは残念でした．
- ポスターセッションが混雑しているため，聞きたいポスターをあまり回ることができませんでした．

やや不満

- 先生ならではの着眼点や，考えを直に聞けることができるという面ではよかったと思います．一方，説明が先生主体の流れになりがちでしたので，内容の理解という面では少し問題がありました．
- メンターの方の専門とは遠いテーマについて，関心を持っている参加者がおり，メンターの方がコメントしにくい状況がありました．メンターを選択の際に，簡単なキーワードを載せると，自分がやっていることと近い方を選ぶと思います．
- 4-5 人の小規模でもなかなかグループメンバーが希望するポスターに回れなかったです．一人で回って議論している人の話を聞く，いつものポスターセッションと変わらなかったと個人的に感じました．

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

5.4 所感と今後の課題

参加者からのフィードバックにある通り，メンターの視点を学ぶ，メンターと交流を持つという点で参加者の満足度が高かった一方，1グループあたりの人数の多さや参加者の興味分野の違いから，希望するポスター発表を見られない，時間をかけられないという点で不満が生じた．今後，このような企画をする場合にあたっては，企画に参加できるメンターの人数や参加者の専門分野の多様性から全員が満足するグループ分けは難しいかもしれないが，できるだけ事前にメンターや参加者の専門分野，聴講を希望する発表の調査・すり合わせを行っておき，当日，スムーズに多くの発表を回れるよう工夫する必要があるように感じた．

6. 【企画 3】ドクターコンソーシアム

MIRU 若手の会では，博士後期課程学生 / 進学予定の修士課程学生の希望者を対象にドクターコンソーシアムを最終日に実施した．ドクターコンソーシアムは，博士課程で取り組んでいる / 取り組む予定の研究のプロポーザル・進捗を参加者が発表し，事前に割り当てられたアドバイザ教員からフィードバックを得るという企画で，CVPR や ICCV といった国際会議でも実施されている．

6.1 開催までの準備

若手の会への申し込み時に，オプションとしてドクターコンソーシアムでの発表を受け付けた．また，コンソーシアム参加希望者に対して適切なアドバイザ教員を割り当て，さらに各教員に希望者の研究内容を把握してもらうため，希望者には自身の研究内容を 2 ページでまとめた予稿の事前提出をお願いした．

コンソーシアムへの参加希望者は 10 名であった．各希望者の所属・研究内容をもとに 2 名がアドバイザ教員として割り当てられるよう，合計 8 名の方をアドバイザ教員として選定し，以下の観点での予稿査読を依頼した:

- 従来の会議論文・雑誌論文の査読とは異なり，博士論文となる研究として，体系的な研究計画 or 成果となっている（なりそうな見込みがある）か
- 現在日本 or 世界 or 学術界 or 産業界でどのような問題・要求があり，それに対して本研究がなんらかの形で接点を持ちうるか（たとえば国内外に関連する大規模プロジェクトがある / あった ということをご存知であれば，そのプロジェクトとの接点など）

本企画は MIRU2015 最終日の翌日に開催されたため，本会議場とは別に大阪大学吹田キャンパスの一室を予約し利用した．

6.2 当日の様子

およそ 4 時間で 10 名が発表できるように，各発表者に対して発表 12 分，質疑 8 分を割り当てた．質疑時間には，まずアドバイザ教員からのフィードバックをお願いし，その後余った時間で会場からの質問を受け付けるようにした．開催までの期間が限られていたにも関わらず，いずれの発表者も綿密に発表準備をしていた．また，いずれの発表に対してもアドバイザ教員から深く建設的なフィードバックがあり，議論は大変白熱した．その一方で，議論が白熱するあまりしばしば設定された時間を超過することがあった．

6.3 参加者からのフィードバック

事後アンケートでは，ドクターコンソーシアムの満足度に関して 33 件の回答があり，その内訳は，満足: 6，やや満足: 14，どちらでもない: 11，やや不満: 2，不満 0 であった．すなわち，およそ 6 割の回答者に好意的な評価をいただいた．以下にいくつかの詳細なコメントを抜粋する．

- コンソーシアムというものに初めて参加したので、単なる発表とは違うことに驚いた。自分が発表したわけではないが、先生方の活発な議論に身が引き締まった。
- 発表者の方々の研究に対して，アドバイザである著名な先生方の意見が得られるため，非常に良い企画だなと感じました．なので，今回発表はしていませんが，また機会があるのであれば，是非発表をしたいと思っています．
- これからの研究について，幅広く方向性のアドバイスをもらえる機会として，とてもよい企画と思います．発言するのが先生方ばかりだったのが少し残念で，学生からも幅広く意見を聞いてもらえると，より深い議論になったのではないでしょうか．多くの参加者で議論すれば，近い分野の人との知識交流の機会，共同研究のきっかけなどにも発展できると思います．分野ごとに複数の部屋で並行してやる方法も考えられます．
- 発表のフォーマットについてもっと最初から決めておけばよかったと感じた。すなわち、自分のD論の構成や方向性、悩んでいる点、議論したい点、などを書けと最初から指示があればよかったかもしれない。また、最終日ということもあり全体的に疲労しているように感じた。発表者が何の研究をしているか知ることが出来るという点からも、最初にやったほうがいいかもしれない。
- ドクターの学生のこれまでの研究紹介が多く，分野外の人にはしんどい内容だった．ドクターに進学した際特有の話がメインになるとよかった．
- 聴講側からすると、研究会で発表を聴講しているのと差がなかったように思います。企業の方々を招くと面白いのではないかと思いました。

6.4 今後の課題

参加者からのフィードバックにある通り，発表者以外の聴講者を積極的にイベントに巻き込む工夫が必要と考えら

れる．今回はアドバイザ教員から発表者へのフィードバックが確実に行えるようプログラムを構成したが，たとえば複数発表を並列で実施し，各質疑時間を長く確保することで，聴講者からの質問を多く受け付けることができるだろう．また，ドクターコンソーシアム自体とは若干趣旨が外れるが，博士後期課程学生が発表するという点に着目すれば，進学・就職等進路に関する座談会のような形式もまた，聴講者にとって有意義な内容になると予想される．実際に，機械学習分野の主要国内シンポジウムである電子情報通信学会 情報論的学習理論ワークショップ（IBIS2015）では，現役博士課程学生が登壇するパネルディスカッションが企画・実施されている．

7. アンケート調査結果

MIRU 若手の会では，参加者の満足度調査や次回へのフィードバックを目的として会期直後にアンケート調査を行った．参加者 44 人中 33 件の回答を得ており，本章ではその結果を概説する．まず，表 2 に示すとおり，参加者の約 8 割は指導教官や職場関係者などの紹介でイベントの存在を認知している．紹介者は MIRU および若手の会の参加経験者や関係者と考えられ，これまでに開催された MIRU および若手の会の満足度が高いことを示している．これは表 3 に示す参加の動機として「先生・上司・先輩・知り合いに勧められたから」の回答率が高かったことからも伺える．ただし，参加者のなかで経験者は 3 割未満に留まる（表 4）ことから，参加者数の増加にはリピータをより多く獲得する工夫も必要であると感じた．また，参加の動機として「他の研究者との繋がりを作りたかったから」の回答率が最も高く（表 3），相互の交流を深めることを主たる目的として掲げた若手の会の方針と合致する結果となった．

若手の会では，参加者同士の交流を深めるために多くの企画を盛り込んだが，表 5 から，参加者はやや負担が多かったと感じていることがわかった．ただし，「程よい」と答えた参加者と「負担が大きすぎた」と答えた参加者がそれぞれ 2 割程度いることから，参加者個別の習熟度合い等に配慮して，どのような参加者でも満足のいくような企画構成にすることが必要であると言える．

若手の会に参加するにあたり，参加者は宿泊費として 25,200 円，懇親会費用として 5,000 円（懇親会の参加は任意）を支払う必要があった．参加費については適正との回答が多かった（表 6）ものの，懇親会費はやや高額であるとの回答が多かった（表 7）．また，表 8 に示すとおり，約半数の参加者が費用に一部補助を受けていることがわかった．なお補助の有無に関わらず，出来るだけ費用を抑え，効率的な運営が望まれていることは言うまでも無い．なお，グループワーク用に広さ 200m^2 の和室を用意したところ，全員が適切なサイズであると回答があった（表 9）．開催期間については，適切であるとの回答が過半数を占めたものの，日数を縮小させる希望も約 3 割ほど挙げられていた（表 10）．

さらに，「参加者間での交流は深まったと思いますか」との問に対して，97% の参加者が「そう思う」または「ややそう思う」と回答した（表 11）．このことから，若手の会の目的は十分に達成され，参加者の満足度も相当に高かったことが推察される．次年度の参加にもポジティブな意見が多数を占めていた（表 12）ことから，本年の若手の会は成功を収めたと言える．

表 2 若手の会をどこで知りましたか

選択肢	回答数	割合 [%]
MIRU ホームページ	13	39.4%
メーリングリスト	3	9.1%
指導教員・先輩・上司・同僚から	26	78.8%
以前から知っていた	10	30.3%
SNS(Facebook, Twitter など)	5	15.2%
Web の検索	0	0.0%
研究会などでの宣伝	2	6.1%
その他	0	0.0%

表 3 参加の動機は何ですか

選択肢	回答数	割合 [%]
他の研究者との繋がりを作りたかったから	25	75.8%
共同研究者を探していたから	2	6.1%
先生・上司・先輩・知り合いに勧められたから	23	69.7%
MIRU の開催期間内だったから	3	9.1%
毎回参加しているから	2	6.1%
その他	0	0.0%

表 4 若手の会・若手プログラムへの参加は何回目ですか

選択肢	回答数	割合 [%]
はじめて	24	72.7%
2 回目	5	15.2%
3 回目以上	4	12.1%

表 5 若手の会の企画はどれくらい負担でしたか

選択肢	回答数	割合 [%]
全く負担にはなっておらずもの足りない	0	0.0%
少しは負担があったがややもの足りない	1	3.0%
程よい感じ	7	21.2%
ちょっと負担だった	16	48.5%
負担が大きすぎたので必死だった	9	27.3%

表 6 宿泊費（25,200 円）について

選択肢	回答数	割合 [%]
高い	1	3.0%
やや高い	7	21.2%
適切	19	57.6%
やや安い	2	6.1%
安い	3	9.1%
無料にすべき	1	3.0%

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

表 7　懇親会の費用（5,000 円）について

選択肢	回答数	割合 [%]
高すぎる	4	12.5%
やや高い	22	68.8%
適切	6	18.8%
やや安い	0	0.0%
安い	0	0.0%
懇親会は不要	0	0.0%

表 8　今回の参加に何らかの補助を受けていますか

選択肢	回答数	割合 [%]
全部私費	1	3.0%
一部補助を受けている	16	48.5%
全額補助を受けている	12	36.4%
無回答	4	12.1%

表 9　グループワークのスペースについて

広すぎる	0	0.0%
適切	32	100%
狭すぎる	0	0.0%
使わなかった	0	0.0%

表 10　若手の会開催期間について

もっと日数を増やして欲しい	2	6.1%
日数は適切	18	54.5%
もっと日数を減らして欲しい	10	30.3%
その他	3	9.1%

表 11　参加者間での交流は深まったと思いますか

そう思う	22	66.7%
ややそう思う	10	30.3%
どちらども言えない	0	0.0%
あまりそう思わない	1	3.0%
そう思わない	0	0.0%
その他	0	0.0%

表 12　来年も若手プログラムが企画されます．参加は検討されますか

是非参加したい	8	25%
できれば参加したいが，予定次第	14	43.8%
参加したいが，難しい	2	6.3%
内容・費用等によって検討する	7	21.9%
もう参加しないと思う	1	3.1%
その他	0	0.0%

8. おわりに

以上のとおり，過去のどの若手企画よりも内容盛りだくさんで，参加者にとっては非常にハードな企画だったが，すべての参加者が非常に熱心に取り組んでくれたこともあり，非常に活気のある充実した若手の会となった．また同時に，過去のどの若手企画よりも，多くの先生方にご支援をいただいた会であっただろう．特別講演者の松下康之先生，ポスターセッションメンターやドクターコンソーシアムのアドバイザ教員をお務めくださった亀田能成先生，黄瀬浩一先生，木村昭悟様，蔵田武志様，佐藤いまり様，千葉直樹様，延原章平先生，平山高嗣先生，藤吉弘亘先生，向川康博先生には心より感謝申し上げたい．

図 8　参加者全員での集合写真

なお，次回の MIRU2016 では，こちらも隔年で開催されている MIRU 若手プログラムが開催される予定である．MIRU に併設されている若手企画として，若手の会と若手プログラムは交互に開催されているが，その実行委員のコミュニティは共通しており多くの参加者にとってもその差異を意識しないイベントである．若手研究者や学生の継続的な支援や，これらのイベントを巣立っていった研究者の活躍を中長期的にトラックしていくためにも，両イベントの接続性を高めていくことが有益ではないかと考えている．その第一歩として，次回 MIRU2016 若手プログラムの概要紹介をもって，本報告を終えたい．

MIRU2016 若手プログラム

- テーマ：「研究に役立つツール・ノウハウ」
- 実行委員：
  - 舩冨 卓哉 (実行委員長・奈良先端大)
  - 石井 雅人 (NEC)
  - 井上 中順 (東京工業大学)
  - 金崎 朝子 (東京大学)
  - 高橋 康輔 (NTT)
  - 道満 恵介 (中京大学)
  - 吉岡 隆宏 (富士通研究所)
- スケジュール（予定）
  - 1 次募集 2016 年 3 月中旬頃
  - 2 次募集 2016 年 6 月中旬頃
  - 開催期間 2016 年 8 月 1 日〜4 日か 5 日
- ホームページ：
  https://sites.google.com/site/miru2016hamamatsu/wakate/

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan